

Better Call Duo



畑 千絵子はイタリアに生まれ、ギタリストの父、畑 研一郎からギターの手ほどきを受けた。チェゼーナ音楽院に入学してステファノ・パラミデッシに師事、同校を卒業後、アメリカのイェール大学音楽学部ギター科に入り、ベンジャミン・ヴァーデーリーに師事。現在はローマに在って演奏活動と教授活動を行なっている。ステファノ・パラミデッシはローマのサンタ・チェチーリア音楽院でギターと作曲法を学び、首高で卒業。その後ソロとさまざまなアンサンブルで世界的に演奏活動を行ない、CDと出版物も数多く発表している。現在はフロジノーネ国立音楽院で教授職にある。師弟で組んだデュオ「ベター・コール・デュオ」は日本語では訳しにくい、「(本物の)デュオと呼ぶべきもの」といった意味であろう。今回のプログラムは彼らの新譜CD(本号の「外盤案内」に掲載)と同じく「Meaningful POP」と題され、曲目もほぼ同じで、アルベニス作品以外はすべて20世紀のオリジナル作品で、しかもギタリスト・コンポーザーの作品が3曲ということも興味深い。

藤井真吾の「ラブソディー・ジャパン」は日本人には馴染みの童謡や唱歌を7曲集めてオリジナルの前奏曲を付けた組曲。

ギター音楽を初めて聴くような聴衆の心も最初から掴む好選曲。当夜は作曲者藤井も京都から会場に駆け付けた。ディアンスの「コム・デ・グランドゥ」は「大物らしく」という意味であろうか。(陰鬱な花) (小さなキノコ) (白いピエロ) の3曲からなる静謐なスケッチ画のような作品。「大物らしく」はディアンス得意の冗談であろうか? ガンジの「イタリア組曲」も3曲(軽快な踊り) (アブリッツォ地方の歌) (タランテラ) から成る急緩急のリズミカルな作品。

二重奏には異なる個性同士のコントラストを重視するタイプもあるが、ベター・コール・デュオはそれとは逆に、同じ製作者による楽器で磨き抜かれた音色、リズム、抑揚で、まるで1つの楽器が鳴っているように音楽を奏でる。レパートリーの仕込みには時間がかかるかもしれないが、世界中のギター二重奏曲を聴かせてほしい本物のデュオである。

プログラム：ラブソディー・ジャパン (藤井真吾)、トッカータ (プティ)、エボカシオン、コルドバ (アルベニス)、コム・デ・グランドゥ (ディアンス)、イタリア組曲 (ガンジ)

[4月12日/東京・スクエア荏原ひらつかホール]